

この本は“歴史的かなづかひ”に拠^よって書きました。なぜ“現代かなづかひ”を使はないかと言ひますと、それは感じが悪いからです。「私は」を「私わ」と書いたら感じが悪いでせう。

「ワタクシワ」と発音してゐても、昔からずっと「私は」と書いて来ましたから、「私わ」と書くと変な感じがするのが当たり前なのです。それと同じ事で、「言はない」を「言わない」と書くのはいやな感じがして、とても書く気になれません。

そもそも“かなづかひ”とは、「かなの使ひ方の約束」であって、文字の使ひ方は過去・現在・未来にわたって通ずる歴史的なものでなければならぬところから必然的に生じた約束です。ですから“歴史的”でなければ“かなづかひ”とは言へないと思ひます。

言葉は、長い間には変化したり、また、死んでしまふこともあります。それは日本語に限らず、どこの国の言葉でもさうです。例へば、英語の one といふ表記は十六世紀に作られたものですが、それはその発音が オウニー だったからです。

その後、この言葉はオウンと発音されるやうになり、また、ウォウンと発音されるやうになりました。現在ではウォンからさらに変化してウァン

と発音されてゐます。

言語学者は、昔から、かういふ現象を「表音文字の墮落^{たらく}」と呼び、「発音とかけ離れた綴^{つづ}りは、発音通りの綴^{つづ}りに改めるべきである」と主張して来ました。しかし、学者たちのさういふ呼びかけには、どこの国でも国民が応じませんでした。

イギリスのムーア・ハウスの著書『文字の歴史』(岩波新書)には「伝統的な綴^{つづ}りを廃止して、表音的な綴^{つづ}りを採用することは、アメリカで実現される気配が一番強い。この国では、書法の伝統がそれほど重くのしかかつてはゐないからである」と述べられてゐます。それは昭和 21 年のことです。

しかしながら、当のアメリカでは、それから十年後、ノアム・チョムスキー氏が「今まで言語学者の 99 パーセントが、伝統的な綴^{つづ}りを改めて、発音通りの綴^{つづ}りを採用すべきだと言って来ました。しかし、そんなことをしたら、大変なことでした。発音通りの綴^{つづ}りが、伝統的な綴^{つづ}りに比べてひどく用ひにくいものであることは、今はフォノロジーの研究で証明されてゐます」と述べてゐます。

彼は、伝統的な綴^{つづ}りと発音的な綴^{つづ}りとの違ひについて、「前者は文章

を理解しようとする人々のためにあるもので、後者は意味を理解しようがしまいが聞いたことをただ再生するためにある」と、明快に区別してゐます。

one といふ綴りからは、どうしたってワンといふ発音は出て来ません。その面から言へば確かに不合理と言へませう。だから、理屈だけに生きる言語学者は、「発音を表さない綴りは改めるべきである」と主張して来たわけです。

しかし、どこの国でも、「表記を発音通りに改める」運動は言語学者だけのものであって、大衆には通じませんでした。例へば、1940年代の後半、フランスの文部省が発音的綴り改正案を国民に示しましたが、国民の激しい攻撃を受けてたちまち撤回に迫り込まれてしまいました。

残念なことに、独りわが国だけが、敗戦で考へる余裕を失ってゐたためか、伝統的な綴り“歴史的かなづかひ”を棄てて、発音的な綴り“現代かなづかい”を受け容れてしまいました。

しかし、当時は世界中の言語学者の 99 パーセントまでが、「伝統的な綴り方は不合理な綴りであって、発音通りに改めるべきである」と主張してゐた時代でしたから、これに抵抗しなかったことはあへて責めない

ことにませう。

でも、今は「発音通りの綴りは、意味を理解しようがしまいが、ただ聞いたことを再生するためのもの」であり、「文章を理解するためには伝統的な綴りである“歴史的かなづかひ”の方が良い」といふ事が証明されてゐるのですから、「過って改むるに憚ることなかれ」です。歴史的かなづかひを用ひる努力をすべきだと思ひます。

幸ひ、最近の国語審議会では、“歴史的かなづかひ”の重要性を指摘し、これを学ぶことの必要性を認めました。歴史的かなづかひは、それに触れてゐさへすれば、自然と理解できるもので、決してひどく難しいものではありません。

わが国の歴史的かなづかひは、外国の伝統的綴りに比べてみて、どこの国のものよりもずっと発音に近く、学習しやすいことは異論の無いところだと思ひます。それに、何よりも自然の理にかなつてゐる表記ですから、書いて気分が良く、学習の仕甲斐があるといふものです。

人間は言葉に依つて作られるものですから、立派な言葉や文字を使つてゐれば自然と立派な人間になりますし、醜悪な言葉や文字を使つてゐれば知らず識らず醜悪な人間になってしまひます。“現代かなづ

かい”は、「歴史的かなづかひは難しい」と考へる^{たいだ}怠惰な精神が作り出したものですから、こんなかなづかひを使つてゐたら^{たいだ}怠惰な人間になつてしまつても不思議ではありません。

私が、“現代かなづかい”を避け、“歴史的かなづかひ”を使つて書くのは、さういふ考へがあるからです。重ねて言ひますが、正しく美しい言葉や文字は、正しく美しい心を養ひ育てます。だから、私は、美しい日本の伝統に従つた“歴史的かなづかひ”に^よ拠つてこの本を書いたのです。